

- (2) 小田勝「係助詞に対する過剰な結びについて」『國學院雑誌』平10・1月号。なおこの構文については伊牟田経久氏注1文献にも取り上げられている。
- (3) 小田勝「二重の係り」『岐阜聖徳学園大学紀要』第38集・平11。
- (4) 川端義明氏「係結の形式」『国語学』第176集・平6、小柳智一氏「係結についての覚書—学史風—」『学芸国語国文学』第33号、平13。
- (5) 「係助詞が文中にあつて活用語がこれを受けるとき、その活用語が活用形を変えざる現象をいう。」(『ベネッセ古語辞典』事項編「係り結び」の項など参照。使用テキストは次の通りである。)
- (6) 竹取物語(『竹取物語総索引』武蔵野書院・昭33)
土佐日記(『土佐日記本文及び索引』白帝社・昭55)
伊勢物語(大系本。『伊勢物語総索引』明治書院・昭47による)
大和物語(大系本。『大和物語語彙索引』笠間書院・昭45による)
蜻蛉日記(講談社学術文庫。通説による)
落窪物語(大系本。『落窪物語総索引』明治書院・昭42による)
枕草子(『枕草子総索引』石文書院・昭42)
源氏物語(『対校源氏物語新釈』平凡社・昭27)
紫式部日記(新大系本。『紫式部日記語彙用例総索引』勉誠社・平9による)
和泉式部日記(『和泉式部日記総索引』武蔵野書院・昭34)
更級日記(『更級日記総索引』武蔵野書院・昭31)
夜の寝覚(大系本。『夜の寝覚総索引』明治書院・昭49による)
狭衣物語(大系本。『狭衣物語語彙索引』笠間書院・昭50による)
とりかへばや物語(講談社学術文庫。通説による)
- 以下、所在は(巻数)、頁数、行数。引用に当って一部表記を改めた所がある。なお、以下、竹取物語から和泉式部日記までの10作品を、中古和文10作品と呼ぶ。
- (7) 小田勝・注2文献参照。
- (8) ただし用言の連体形に接続する断定の「なり」は結びの連体形にならない(北原保雄氏「なり」の構造的意味」『国語学』68輯、昭42)ので、「悲しき事になむおぼして宣ふ。」のようになるだろう。
なお、
・その名をなん寛蓮大徳といひてのちまでさぶらひける。(大和・二三二—一七)
- (9) 宮をこそいと情なくおはしますと思ひて御いらへをだに聞こえずはるめれ。(源・蜻蛉・⑥二三—11)
- (10) 佐伯梅友氏「和歌の文法」(『和歌文学講座 第一巻』桜楓社・昭44)二六八頁、松尾捨治郎氏「国語法論攷 追補版」(白帝社・昭45)九五頁、伊牟田経久氏・注1文献など。
- (11) 伊牟田経久氏注1文献では、係助詞は「トと結び」全体と関係している。ので違例ではないとし、このような係結を積極的に認めようとしておられる。なお、14、16のような「トを越えて係る」場合と、17、19のような「トを越えて係らない」場合とで、引用のあり方に何らかの差がある可能性がある。今後考えたい。
- (12) 結びの消失、消滅、解消などともいう。
- (13) 小田勝「係結の流れをめぐって」『国語学会平成10年度春季大会要旨集』、小田勝「結びの流れ」からみた係結の表現価値」(近刊)。
- (14) 注12。
- (15) 注4。
- (16) 終助詞か間投助詞かの議論は今ほ措く。
- (17) 「しが」(狭衣)は「にしが」。「かし」のうち1例(狭衣)は「ぞかし」。
- (18) 上村悦子氏「蜻蛉日記校本・書入・諸本の研究」(古典文庫・昭38)による。注3。
- (19) 新大系脚注による。

になつてゐるもの、および「こそ」の結びが文末にあつて、已然形以外の活用形になつてゐるものを「係結の不整合」という。この調査では――校訂本文を用いてゐるが、それでも――中古和文10作品中に右のような例が37例みられる。ほとんどが誤写によるものと思われるが、51のように現存伝本中に異文のない例もみられる。また、

53 われはと思ひあがれる中将の君ぞ、「…」など聞ゆ。(源・初音・③二―4)

などは途中に比較的長い引用文を挟んだための誤用と考えることもできるかもしれない。

この種のもので興味を引くのは、文がねじれていて、係助詞の(付いた成分の)係り先が不明な例である。

54 隅の間ばかりにぞ、いと寒げなる女房、白き衣のいひ知らずすすけたるに、きたなげなるしびら引きゆひつけたる腰つき、かたくなしげなり。(源・末摘花・①二五四―13)

のような例で、「隅の間ばかりにぞ」の係り先が消失している。

55 …と、また人の語りしこそ、見ぐるしき我ぼめどもをかし。(枕・一四五―3)

も、「人が語つたことが、聞き苦しい自慢話デおもしろい」という意味かとも思われるが、そうした意味になる構文的根拠を説明し難い(なお能因本は「我ぼめなりかし」であるが、その場合もコソの結びに終助詞「かし」が付いた、非常に珍しい句型となる―第五節参照―)。

八 結 論

以上、本稿では「―ぞ―連体形」、「―なむ―連体形」、「―こそ―已然形」以外の句型を「係結の違例」とし、八タイプに分類して、考察を加えた。その結果、係結について次の諸点を指摘した。

一 従来違例とされた、「過剰な結び」のうち、
i 「連体修飾語十名詞十断定辞」の句型で、係助詞の付いた文節が意味上連体修飾語に係ると判断されるもの
ii 一続きの事態を表す「用言 α + 十用言 β 」の句型で、係助詞の付いた文節が意味上その上部(用言 α)に係ると判断されるもの

は、この句型が常態であつて、正用法であること。

二 したがつて係結は意味上係らない文節に対しても行われること。
三 用例数からいって、「なむ」「こそ」の結びの下に終助詞が付くことは違例であるが、「―ぞ―連体形十や」、「―ぞ―連体形十かし」

は一定量の用例があり必ずしも違例とはいえないこと。

四 「体言を結びとする係結」は中古和文中に極端に例が少なく、少なくとも中古和文中にあつては違例と判断されること。

五 「結びの流れ」は後代の作品ほど発生率が増加する傾向にあり、係助詞(ぞ・なむ・こそ)が陳述に影響するという本質的機能から、成分の卓立という機能に移行しつつあつた結果と考えることができるかもしれないこと。

「トを越えて係る係結」と「トを越えて係らない係結」と(第二節参照)で、引用のあり方に違いがあるかどうか、終助詞の付く係結がなぜ「ぞーや」「ぞーかし」だけに集中するのか(第五節参照)、また両者はどのように違うのか、など今後の課題としたい。

注

(1) 係結の誤用とされる例について正面から取り上げたものに、伊牟田経久氏「係り結びについての一考察―誤用とされる例をめぐって―」(『国文薩摩路』41号、平9)がある。

る（竹取、伊勢、土佐、大和には用例がない）。

蜻蛉日記	ぞーやぞーかし	その他（括弧内の数字は用例数）
落窪物語	八	ぞー体言+かし(1)、なむーや(1)
枕草子	一	二 なむーは(1)、なむーかし(1)
源氏物語	七四	三七 ぞーよ(1)、ぞーかな(1)、なむーかし(1)、 こそーな(6)、 こそーや(1)
紫式部	四	六
和泉式部	三	二
更級日記	五	一
夜の寢覚	四二	三 ぞーな(1)、こそーな(1)
狭衣物語	二一	七 こそーな(3)、こそーは(2)、こそーかし(2)、 こそーや(1)、こそーかな(1)、こそーしが (1)
とりかへばや	二二三	七 こそーや(1)

右表にみる通り、中古和文14作品中、「ぞ」に対する結びの後に終助詞が付いているもの278例、「なむ」は4例、「こそ」は19例である。また結びの後に付く終助詞は、多い順に、「や」197例、「かし」86例、「な」

11例、「は」3例、「かな」2例、「よ、しが」各1例である。¹⁶⁾「ぞ」の結びに終助詞が付く率は、『枕草子』、『源氏物語』ともに10%である（枕草子Ⅱ全242例中25例、源氏物語Ⅱ全1153例中113例）。「ぞー結び+や」、「ぞー結び+かし」の句型は例数からみて必ずしも違例とはいえない。しかし、なぜ「ぞ」の結びだけに起こるのか、またなぜ終助詞がこの二つに限られるのか、今のところ明らかではない。後期作品の『夜の寢覚』では「ぞ」の結びに終助詞が付く率が21%に達するが（全220例中46例）、『狭衣物語』では6%なので（全434例中28例）、時代が下るにつれて終助詞が必要とされてくるとも必ずしも言えないようである。

六 二重の係り

50 「…」と言ふしもぞ「…」とぞおぼえたる。（蜻蛉日記・中二六一・異文なし）¹⁷⁾

のように、係助詞の付いた文節が一文中に二つ（以上）あって、それらが同一の用言に係っているものを「二重の係り」という。例数は極端に少なく、違例と思われるが、それでも右例のように異文のない例も存する。「ぞ」「なむ」「こそ」にあっては必ず同じ係助詞による「二重の係り」しか得られないことが注意される。¹⁸⁾

七 係結の不整合、構文把握困難・係り方不明

51 この命婦ぞ、ものの心得て、かどかどしくは侍る人なれ。（紫式部・三二一—3。現存伝本全て「命婦ぞ」）¹⁹⁾

52 茎はいとあかくきらきらしく見えたるこそ、あやしけれどをかし。（枕・四七—5）

のように、「ぞ」「なむ」の結びが文末にあって、連体形以外の活用形

- 33 すべて女は、柔かに心うつくしきなむよき事とこそその中納言も定むめりしか。(源・宿木⑤三〇二—一—8)
- 34 「なにがしこそ、ただいまの時の人」などいふを(枕・一三六一—4)

また、35のように文中の体言を結びとする例が3例あり、結局、文末の体言と呼応している例は5例しかなく、しかもそのうちの3例は36・37のような紫式部日記の人物表示の例であって、その他の例は38・39の2例しか得られない。

- 35 宰相の君ぞ 十ばかり、それもおぼゆるかは。(枕一九—8)
- 36 宮の内侍ぞ、又いときよげなる人。(紫式部・三〇一—1)
- 37 清少納言こそ、したり顔にいみじう侍りける人。(紫式部・三〇九—15)
- 38 「…これのみぞあかずおぼゆる事。さては、老のはて、死のはてのおもだたしきは…」(落窪・二〇八—8)
- 39 「今はまろぞ思ふべき人。なうとみ給ひそ」と宣ふ。(源・若紫①二二—3)

「体言を結びとする係結」を正常なものと認め、積極的に係結の中に位置づけようとする意見もあるが、少なくとも中古和文中の「ぞ」「なむ」「こそ」については、指定の「なり」の省略された一種の違例と考えてよいのではないだろうか。そう考える理由は、(1)用例数が僅少であること、(2)大部分の用例が引用の「と」の直前であって、引用の「と」の直前は40、41のように屢々指定の「なり」が省略されること、(3)実際「体言を結びとする係結」の延長線上にあって述語の省略された例が存すること(用例42、44参照)、などである。

- 40 「…。人に言ひ騒がれ侍らむがいみじきこと」と言ひて、(源・夕顔・①一五一—8)
- 41 いとどあはれと御覧じて(源・桐壺①四—8)

- 42 「大路よりはもりまさりてなむ、ここは中々」といらへけり。(大和・三四七—2)
- 43 「…ただ御うしろばかりをなん、はつかに」と聞こゆれば(枕・一一八—3)

44 忌みの所になむ 夜ごとに、と告ぐる人あれば(蜻蛉日記・下二九七—1)

右42、44のように結びが表出されていないもの、及び文が終止の形態をとっていないものを「係結の不成立」と呼ぶ。類例をあげる。

- 45 「…まめやかに苦しげなる御けしきにてなん、御返事も。…」(落窪・六四—8)
- 46 まろがうへをなん、中々親たちにまさりて。(落窪・三三七—11)
- 47 …と思ひ給ふるこそつみふかく。さるは…(和泉式部日記・六四—6)

このような「係結の不成立」の用例は、「体言を結びとする係結」の2倍ほどの用例数がある。「体言を結びとする係結」も、「係結の不成立」の一種であって、その殆どは引用の「と」の直前において指定の「なり」が表出されなかったものと考えてよいのではなからうか。

五 結びの述語に終助詞が付いているもの

- 48 高座のうへも光りみちたる心地して、いみじうぞあるや。(枕三八—3)
- 49 さやうなるをりぞ、人歌よむかし。(枕二二六—2)

のように係結の文末に終助詞が付いている例がある。この場合、用例の殆どが右のような「ぞーや」「ぞーかし」であって、(1)「や」「かし」以外の助詞が文末にくること、(2)「なむ」「こそ」に対する結びに終助詞が付くこと、ともにほとんど用例をみない。状況は左表の通りであ

26 源氏のおとども、いと口惜しう、よろづの事押し譲り聞えてこそいとまもありつるを、心細く事繁くもおぼされて、歎きおはす。(源・薄雲・②一四五―七)

のように、係助詞の付いた文節が、そこで切れない文節(文中の用言)に係る場合、係結は成立せず、結びは「流れ」という⁽¹¹⁾。係結の本質が、

抑も係とは述語の上においてその陳述の力に関与する義にして結とは係の影響をうけて陳述をして終止するをいふなり。(山田孝雄『日本文法学概論』四七六頁、傍線引用者)

ということにあるならば、なぜ「結びの流れ」という現象が起ころのたろうか。この現象の位置づけには次の二つの立場があると思われる。

i 係助詞の本質は成分の卓立にあるので、従属句内に係助詞が生起するのも当然である。

ii 係結の本質は結びが係助詞の影響を受けて陳述して終止するところにあるので、従属句内に係助詞が生起して「結びの流れ」を起すのは違例である。

筆者が前に中古の和文資料10作品から「結びの流れ」の用例を採集した結果、「結びの流れ」の率は作品、ジャンルを越えてほぼ一定しているようで、

こそ⁽¹²⁾ 5%、ぞ 9%、なむ 16%

程度である。このことは、「結びの流れ」がそれほど頻繁・普通に起きていないことを示している。いわば係結はかなり「律義」にされているのである。このことから、やはりiiの立場が支持されよう。後代の和文資料では、「ぞ」の流れが『とりかへばや物語』で19%、『夜の寝覚め』で20%、「こそ」の流れが『増鏡』で30%になるなど、「流れ」を起す率が増加する傾向にあるので、「結びの流れ」の現象は、本来iiを本質とする係結が弛緩し、iへと移行しつつある結果と考えるこ

とができるかもしれない。

前に述べたように、結びが「流れ」た後の主文には特徴があつて、「流れ」た後の主文は、25、26のような平叙文に次いで、

27 御子は、故北の方の御腹にも二人のみぞおはしければ、さうざうして、神仏に祈りて、今の腹にぞ男君一人まうけ給へる。
(源・紅梅④三六七―10)

28 「歌」とてなむやりたまへりければ、いとなくめでて、のちまでなむかたりける。(大和・二三三―10)

のように流れた係助詞と同じ係結で結ぶことが多いこと、「ぞ」の結びが流れた後の主文に命令文はこないこと(つまりモデル的に言えば「雨こそ降れど行け!」とはいえるが、「雨ぞ降れど行け!」とは言えない)などの興味深い事実がある。

四 体言を結びとする係結、係結の不成立

29 渡守に問ひければ、「これなん 都鳥」といふを聞きて(伊勢物語・一一七―11)

のような構文を「体言を結びとする係結」という。中古和文10作品において「ぞ」「なむ」「こそ」の結びが体言である例は極端に少ない。私見では25例を得るだけである。これは後に述べる「係結の不成立」が50例存するのに比しても、非常に少ないといえる。しかも25例の大部分は左のような引用の「と」の直前の例である(17例)。

30 「これなむみちのくにのつと」とておこせたりければ(大和・二五八―5)

31 すさびごとぞよなき事と思へど(源・関屋②一八〇―9)

32 その焰なむ誰ものがるまじき事と知りながら(源・鈴虫④二〇七―12)

13 此の事（源氏物語大納言ニスルコト）をなんし侍らんと思ひ侍る。（落窪・二〇九―二）

のような、(iii)「引用句中に係助詞があり、引用外部たる引用動詞に曲調終止が行なわれているもの」である。類例をあげる。

14 こよなくやつれてのみこそ詣づと知りたれ。（枕・一二九―八）

15 この鏡をなむ奉れと侍し。（更級・三八―四）

16 「子ヲコチラヘ」迎へてんと思ふを、そちこそ（源氏物語方カラソチラヘ）参らんと思へ（源氏物語参ロウト思ウノデス）。（夜の寢覚・一三六―四）

右のような「トを越えて係る」例は中古和文中に（特に和歌中に）

ある程度みられ、このような係り方の存在が屢々指摘されてきたが、

左のような、理論上の正用法たる「トを越えて係らない」例が大量に存在することに照らして、このような係結はやはり違例であると思われる。

17 「…にこそめでたかりけれ」とみそかに言ふ。（源氏物語①七六―一十二）

18 「かくなむ思ひよれる」と宣ひちぎれり。（源氏物語①八八―四）

19 「…中川のわたりなる家なむ、此頃水せき入れて、涼しき蔭に侍る」と聞こゆ。（源氏物語①七一―五）

なお、このタイプには14、16のような、係助詞が引用句外の述語にだけ影響している（トの内部が終止形や命令形になっている）場合と、

20 「…」。「葵上ハ」よくぞ短くて斯かる夢（源氏物語須磨退去ノ事）を見ずなりにけると、思う給へ慰め侍る。…」（源氏物語②六一―五）

21 わが（源氏物語御宿世も、この御事（源氏物語姫君誕生）につけてぞかたほなりける（源氏物語須磨流謫トイウ禍ガアツタノダ）とおぼさるる。（源氏物語②一一九―五）

のように、意味上の係り先である引用句内の述語と、引用句外部の述語との双方に影響している（ように見える）場合とがある。しかし20、21の文末は係助詞と関係なく連体形終止が別に起こっていると考えてよいだろう。

第四のタイプは、右に述べたような、文末が（係助詞と関係なく）連体形終止していると考えられる例で、

22 「源氏物語柏木ハ」うべうべしき方（源氏物語学芸ノ道）をばさるものにて、怪しう情を立てたる人にぞ物し給ひければ、さしもあるまじき

おほやけ人、女房などの、年ふるめきたるどもさへ、恋ひ悲し

び聞ゆる。（源氏物語柏木・④一六九―九）

23 「源氏物語宮ハ」猶この御心地例ならぬさまにて、今ぞ奥さまに転び入らせ給ひぬれば、人々、絵取り散らして見ける。（源氏物語狭衣・五七―六）

のようである。これらは、24 「…」とこそ申し給へば、いみじきさいはひおはしける。（源氏物語②二二六―一十一）

のような例に照らして、結びが流れた（次節参照）後、文末が連体形終止をしているものと判断される。

「過剰な結び」には、右第三のタイプのように誤用によると考えられるものも存するが、第一、第二のように正用法とみられる句型もあり、係結は意味上係らない文節に対しても行われることが知られるのである。

三 結びの流れ

25 別納のかたにぞ、曹司などして人住むべかめれど、こなた（源氏物語西ノ対）は離れたり。（源氏物語夕顔・①一三二―八）

二 過剰な結び

係助詞の付いた文節が意味上文末に係らないにもかかわらず、文末がその係助詞に対する曲調終止をしているとき、その曲調終止を「過剰な結び」という。例えば、

2 「源氏ハ」わざとの御学問はさるものにて、琴笛の音にも雲居をひびかし、「美点ヲ」すべていひつづけば事事しう、うたてぞなりぬべき人の御さまなりける。(一―1)

のようである。この傍線部「うたてぞ」は意味上「なりぬべき」に係るにもかかわらず、そこで所謂「結びの流れ」を起こさず、係助詞が(意味上)係らないはずの文末が連体形で結ばれている。

例 違 このような「過剰な結び」は私見では四つのタイプに分類される。まず第一は、用例2のような、(i)「連体修飾語+名詞+断定辞」の句型で、係助詞の付いた文節が意味上連体修飾語に係ると判断されるにもかかわらず、断定辞が係助詞に対する曲調終止しているものである。これは、理論上の正用法である、

2 b うたてぞなりぬべき人の御さまなりけり。
 という文が存在しないので、(i)のタイプの係結は常態(正用法)であると思われる。類例をあげる。

3 …とぞ推し量られ給ふ人の御けはひなる。(源・椎本・⑤八一―13)

4 さきの世こそゆかしき御有様なれ。(源・東屋・⑥三六―7)

5 かう口惜しき濁り(『夕霧ト雲居雁トノ事』)の、末に待ち取り深く澄むべき水こそ出で来たかべい世なれ。(源・行幸・③一三三―5)

6 故殿の心おきてのみこそ、この世の思ひいでにすべき身なりけれ。(夜の寝覚・三五八―13)

「過剰な結び」の第二のタイプは、

7 「…」となむいひてゐたりける。(大和・二六二―3)

8 …とぞおぼしなして、咎めさせ給はざりける。(源・賢木・①四二〇―11)

9 …と見るこちぞ添ひてただならざりける。(蜻蛉日記・下二七二―5)

10 わが男どもも、その御方々をこそ、心憎く奥ゆかしきわたりには思ひて、集ふめれ。(とりかへばや・④七三―9)

のような、(ii)「…」の事態を表す「用言 α +十用言 β 」の句型で、係助詞の付いた文節が意味上その上部(用言 α)に係ると判断されるにもかかわらず、用言 β が係助詞に対する曲調終止しているものである。

11 「源氏ガ夕顔ヲ」世に忘れがたく悲しき事になむ おぼして、わが子を尋ね出でたると人には知らせて」と、そののかみより宣ふなり。(源・玉鬘・②三八三―9)

のように接続句「…て」内で流れた例は多いが、「用言+十用言。」という、文末の用言の単純な連続において、「…て」の部分で流れを起こしている用例は見出しにくい。11の例も途中で他の語句を介在させなければ、

11 B 悲しき事になむおぼして宣ふなる。

のようになるものと思われる。(ii)のタイプも係結として常態(正用法)であると言えよう。このことからすれば、左例の文末は連体形であると考えらるべきである。

12 「夕霧ハ」…と、大方に(『一通リノ見舞イノヨウニ)ぞ聞えごちで出で給ふ。(源・夕霧・④二二―7)

第三のタイプは、

小田 勝

Rethinking of Kakari-musubi phenomena
based on exceptional cases

Masaru Oda

○ 本稿の目的

係結は国語の文を考える上で重要な現象であり、すでに多くの研究がなされている。しかし、係結には違例、破格、誤用などとされる例があり、それらの全体像はなお明らかではないように思われる¹⁾。筆者は前に、従来違例・誤用とされてきた、

1 「源氏ハ」わざとの御学問はさるものにて、琴笛の音にも雲居をひびかし、「美点ヲ」すべていひつづけば事事しう、うたてぞなりぬべき人の御さまなりける。(源氏・桐壺・第①冊二二頁3行)
のような例について考察を加え、1のような句型が必ずしも違例とは言えないことを明らかにした²⁾。また、前稿では一つの結びに二つの係助詞に係る現象(「—ぞ—連体形」のような³⁾)について考察した。係結の本質に迫る上でも、このような、違例、誤用とされる構文について、詳細に調査される必要があると思われる。本稿は、中古和文における係結の違例の全体像の整理を試みるものである。

一 係結の違例

「係結の違例」にどのようなタイプのものがあるかは、「係結」をどう定義するかによって異なってくる(例えば体言を結びとする係結を認めるなら、「—ぞ—体言」という句型は違例ではなくなる)。一方、係結の定義は、どのような句型を違例と認めるかによってゆれ動く。これでは一種の堂々めぐりになってしまうので、まず、係結を最も狭く、

「係結」とは、係助詞が文中にあって文末の活用語がこれを受けるとき、その活用語が活用形を変える現象をいう。

のように定義し⁵⁾(仮の定義)、右の定義に違反するものを、「係結の違例」とするところから出発しようと思う。すると、中古和文中の「係結の違例」は、次の八タイプに整理されることになる。

- (1) 過剰な結び、(2) 結びの流れ、(3) 体言を結びとする係結、(4) 係結の不成立、(5) 結びの述語に終助詞が付いているもの、(6) 二重の係り、(7) 係結の不整合、(8) 構文把握困難・係り方不明

以下、右の八タイプについて節を改めて考察し、中古和文中の「係結の違例」の全体像を示そうと思う。その過程で係結の定義もまた改められることになるだろう。資料は、

竹取物語・土佐日記・伊勢物語・大和物語・蜻蛉日記・落窪物語・枕草子・源氏物語・紫式部日記・和泉式部日記・更級日記・夜の寝覚・狭衣物語・とりかへばや物語

の中古和文14作品を使用し、「ぞ」「なむ」「こそ」の三語を考察の対象とした。和歌(引歌部分を含む)中の用例は対象外とした。